

實是訓する凡も甲斐は假字なり、字には勿て解すべからず、是俗説の誤也。

〔萬葉集三  
雜歌〕詠不盡山歌一首并短歌

奈麻余美乃甲斐乃國打緣流駿河能國與己知其智乃國之三中從出之有不盡能高嶺者略中

右一縉高橋連蟲麻呂之歌中出焉以類載此

〔詞林深葉抄五〕打緣流駿河國

なはみのかひの國とは、なはやかにかほる香のよきとつくる地。

〔冠辭考七〕櫛ははみのかひのくに

万葉卷三に不盡の歌奈麻余美乃甲斐乃國打緣流駿河能國與云々こは生弓の返るといふを、かくにいひかげたる名なるべしなる故に甲斐に冠らせ。御也、調禮に弓をくらぶ幹角を熟於火燭膠法を擧て、然則居旱亦不動、居濕亦不動、苟有賤工必因角幹之濕以爲之柔善者在外動者在内、雖善於外必動於内といへゆされど、皇朝の古き弓はたゞ木のみにて作られて、膠して竹を合せなど、前名事はなかれ。兵庫寮式に御梓弓の様を委くあるされしに、膠も竹も舉られぬは延喜の御時までも、木のかぎりなし事しらる。今も太和の太安寺法隆寺などにある古き弓はしがなれ、さてその木のかぎりなる弓もまだなはなる新弓は、動き反曲けんか丸文續日本紀に信濃よりおほく弓を獻る事見えて、集中に信濃の真弓ともよみたれば、甲斐に冠らずべき事と思ふ。人をわれど、そは冠辭の意をよくも見て思へる物也。されば、甲斐に冠らずべきかひとてさる意あらんかは、くにつ物もでその所に冠らざると思ふるは誤り也。

〔甲斐義記〕國名

萬葉集高橋蟲麻呂が奈麻余美乃加比といへる詞、諸説區々にして一定せず、欽○大按するに、詩の外雅の注に、惑は必ず欲而自彊辭とあるを、萬葉集に奈麻志斐と訓れど、奈麻とは生熟の生にして與美はやがなめ、ヨリヤと同韻にして通へり、奈麻也美は淺闊きをいへり、カヒは山